

**特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果，世界的位置付けなど。****( 評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容 )****< 特筆すべき教育活動 >****( 社会人を対象とする講習会：リモートセンシング技術 )**

佐藤教授は、社会人技術者を対象とする地中レーダに関する講習会を10月8,9日東北大学東京分室にて開催した。地中レーダ(GPR)は計測そのものは非常に容易であるが、電波やレーダ装置の正しい理解なしに有効な結果を得ることが難しい技術である。本チュートリアルでは10月8日の入門コースにおいて、初心者向けの概要を説明し、10月9日のコースでは、やや専門的な説明を行った。約60名の参加があった。

**( ロシア人学生を対象とする日本学講習会 )**

2009年度訪問講座「日本とアジア」の開催(11月19日・20日)

ノボシビルスク国立大学東洋学部との取り決めに基づき、第一回目の訪問講座を実施した。対象は同大東洋学部の日本語専攻の学生であるが、当日は、市内の日本語を学ぶ学生など合計100名余が出席した。講師は、本学大学院文学研究科長岡教授、尚絅学院大学千葉准教授、本学東北アジア研究センター岡教授の三名である。すべて日本語によるレクチャーであったが、二日目に実施したアンケートによると、学生の理解度は高いと思われた。これにより、ノボシビルスク大学及び同地域の日本語および日本への関心と、日本語能力の高さが確認された。

ノボシビルスク大学東洋学科学生発表会(11月20日)

昨年に引き続き、二日目の午後に21名の学部学生による研究発表会が行われた。各自5分程度の発表に対して、日本側の教員が質問・コメントを行った。学生の発表は、日本の文学、言語学、民俗や神話、若者文化、女性とジェンダー、高齢化といった多岐にわたった。

**( 全学教育における取り組み：ロシア語 )**

柳田准教授は全学教育において、「ゆとり教育」の弊害としての学部新入生の学力低下に対処すると同時に学部学生のロシア・旧ソ連地域への興味に対応すべくロシア語のカリキュラムを改め、「部局負担コマ数外」として3年次学生用の「展開ロシア語Ⅲ・Ⅳ」を平成21年度より新規開講した。現在2年次学生用の「展開ロシア語Ⅰ・Ⅱ」が文系学部についてしか選択必修科目ではないことにより3年次学生を対象とする新設科目である「展開ロシア語Ⅲ・Ⅳ」の履修者が多くなることは当分見込めないものの、初年度である平成21年度には3名の履修者がおり、その全員が最後まで脱落することなく履修を続けた。そして、21年度末時点での学生による授業評価アンケートによれば3名の学生の全員が自らの学力に確かな向上があったと考え、また授業自体に対する満足度も極めて高かったことが明らかであり、その学年末試験の成績も客観的に見て満足すべき水準に達していた。また、特に、教材としてドストエフスキーの中編小説『白夜』の冗長部分を削りながら原作の文体を崩さず、難易度も落としていないテキストを用いるという工夫をしたことによって、学生に対して「ドストエフスキーの原文が読めた」という非常に大きな達成感を与えることができたということが授業評価アンケートの自由記述部分から明らかに見て取れた。

また、大学院環境科学研究科において、平成19年4月から平成21年9月まで、自身が中央アジア多言語使用社会におけるロシア語・朝鮮語コードスイッチングという現象を観察した経験を応用し、朝鮮学校出身在日朝鮮人の日本語・朝鮮語コードスイッチングを研究テーマとする博士前期課程の学生を指導した。この学生は中国朝鮮族という自らの属性を十分に活用して在日朝鮮人の日常言語という日本人研究者にとっては採集自体に非常な障壁がある音声資料を大量に収集することに成功したが、それを基盤として優れた内容の修士論文を執筆することができ、審査委員の全員から高い評価を得て平成21年9月に前期課程を修了することができた。

**(アウトリーチ)**

仙台市教育委員会と東北大学が協力して実施する仙台市内中学校での「東北大学出前授業」を佐藤教授が実施し、同様に中学生を対象とする「夏休み大学探検」に佐藤教授が出講した。

また6月東北大学サイエンスカフェにおいて奥村教授、11月東北大学リベラルアーツサロンにおいて明日香教授がそれぞれ講師を務めた。

**< 特筆すべき研究活動 >**

(グローバル30への貢献、ロシアとの研究交流推進)

東北大学とロシアとの研究・教育面での交流を推進するため、塩谷助教、徳田助手などロシアでの実務経験を有し、ロシア語で実務を行える教員が、東北大学のロシアにおける活動を直接サポートした。

(東アジア出版研究)

磯部教授は平成 19 年度より 3 年間にわたり、アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア出版文化国際研究拠点形成及びアジア研究者育成事業」(日本学術振興会)を実施した。本事業では、国際セミナー(4 回)・共同研究・研究者交流を通して、日中韓三国間の出版文化国際研究拠点を確立し、若手研究者の育成を推進した。また、古典籍展示会・論文集・ホームページ等で社会に研究成果を公表し、同時に出版文化に係わる情報を広く公開した。

(アジアの地質研究)

石渡教授は長年の「オフィオライトと東北アジアの地質学的研究」の成果により平成 21 年 9 月 4 日に「日本地質学会賞」を受賞した。また石渡教授は統合国際深海掘削計画(IODP)の科学立案・評価パネルの共同議長を平成 20・21 年度の 2 年間(4 回)務めた。

(ロシア遊牧民研究)

高倉准教授は、シベリア民族学の研究を国際的な研究連携ネットワークを作りながら精力的に実施している。具体的には 2009 年 5 月 15-18 日において、当時の客員准教授 F・ステムラー氏(2009.1-2009.7)とともに、日本人 8 名とフィンランド人 8 名の研究者を招聘した国際ワークショップ「Social significance of animals in nomadic pastoral societies of the Arctic, Asia and Africa」を開催し、内外 25 名ほどの参加者を得た。そうした活動の結果、シベリア地域についての国際学術雑誌 Sibirica 誌 8-1 号に特集サハ研究で招聘論文(査読付)として掲載されたほか、上記の国際ワークショップの成果は、共編著『Good to Eat, Good to live with』として上梓された。これは国際極北社会科学学会(IASSA)のニュースレター(2010 年 5 月号)で紹介されるなど、国際的にも注目を集めている。

(中国の民族研究)

瀬川教授は、現代中国の主要な民族理論である費孝通の「中華民族多元一体構造論」に実証的な検証を加え、その学術的価値と限界とを客観的に明らかにする研究を行った。3ヶ年にわたる同研究の成果は、既に科研費の報告書としてまとめられたが、現在は市販学術書として発刊の準備を進めている。

(モンゴルの歴史研究)

東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所・中国内モンゴル師範大学蒙古学研究院共催国際シンポジウム「モンゴル史研究と史料」の開催(9月20~21日)  
冷戦終了後のモンゴル史研究は、各国に所蔵される史料の利用可能性が劇的に改善されたことから、大きな進展を見せている。このシンポジウムでは、近年モンゴル史研究の中心となっている日本・モンゴル・中国の研究者が、公文書史料や年代記史料など、新たに発見、あるいは利用可能になった史料と、これによる研究状況について報告・討論を行った。シンポジウムは、国際モンゴル学会議の要請により、第一回国際モンゴル学会議開催 50 周年記念行事として位置づけられ、岡教授が日本側コーディネータとして組織した。

< 特筆すべき社会貢献活動等 >

( 地域防災への貢献 )

本センターに設置している「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」では、平成21年度にNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークおよび白石市教育委員会と連携して同市内民家の調査を実施し、全国的にも注目される鎌倉時代末から戦国時代にかけての古文書約40点を発見した。また本センターの平川教授を代表とする東北大学防災科学研究拠点のプロジェクト「地域の人間と社会を災害から守るための実践的防災学の推進」が、文科省概算要求の特別経費として採択され、平成22年度から5か年事業として実施されることになった。本事業は来るべき宮城県沖地震に備えて、本学の理系文系の防災関連研究者が連携して共同研究に取り組むものである。

( 減災に関する地域貢献 )

佐藤教授は岩手・宮城内陸地震で行方不明となっている車両の搜索を栗原市からの依頼によって実施した。

( 科学技術による地雷除去活動 )

佐藤教授は2009年4月よりカンボジアにおいて地雷検知器ALISの現地試験を開始し、実地雷原において40個以上の実地雷を検知する実績をあげた。本試験は現在も継続中である。

( 研究成果の社会還元 )

高倉准教授は、シベリア民族学研究の社会還元を、写真家や空間デザイナーなど職業専門家などの協力のもとに、国内外的に行なっている。2008年12月にせんだいメディアテークで行なったトナカイ牧畜民の民具と民俗写真展は3日間で1045人の訪問者を記録した。その展示は、日本ディスプレイデザイン協会主催（朝日新聞社後援）の『ディスプレイデザイン賞2009』で入選した。さらに、研究成果の社会還元と国際交流を深めるために、カシオ科学財団の助成金を下に、民俗写真展を調査地のシベリアの村落で実施するための活動を行なった（2010年3月）。また、人類学フィールド調査で必要とされる映像記録の技術理解と技能向上のための短期集中講習会を企画・組織し、広く一般に向けて行なった（2008.2、2009.2、2009.9の三回）。それらの成果は、『デジタル写真と人類学：東北アジア研究センター写真ワークショップの記録2008-2009』、『トナカイ！トナカイ！！トナカイ!!! 研究成果を市民に還元する自主展示の試み』として刊行された。